
目次

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目薬

【Nコード】

N6011Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

麻里子はCMで見たそれだけで変われるという目薬を買ってそれを使ってみた。すると起こったことは。ドラえもんに出て来る道具や昔の小学館の学習雑誌に載っていたような童話を思い出しながら書いた作品です。

第一章

目薬

「これであなたも変われます！」

最近巷でこんなCMが流れていた。

「目薬をするだけで！それだけで理想のあなたになれます！」

「そうなの？」

それを聞いてだ。幣原麻里子は思わず画面を見てしまった。

麻里子は背が高くはつきりとした顔をしている。髪は茶色をかけてショートヘアにしている。少し日本人離れた感じの顔に長身に相応しい見事なプロポーションをしている。手足も実に長い。その彼女が今そのテレビのCMを見て呟いていた。鹿児島出身である。

「それで変わるんなら」

いいと思ったりもした。実は彼女は外見は派手だが中身は実に引っ込み思案なのだ。それで鹿児島出身だというのに気の弱い性格をいつも気にしているのである。

それでそのCMを見てだ。心を動かされた。

「それなら」

それでだと思っただ。すぐに薬局に向かった。そこであの目薬を注文した。

「あの・・・」

「はい、何でしょうか」

「あの目薬下さい」

こう、まるで蚊が鳴く様な声で言う。

「CMの目薬を」

「あの目に入れたら変われるってやつですね」

「はい、そうです」

まさにそれだというのである。

「それ、下さい」

「わかりました、はいこれですね」

店の若い店員はすぐにその目薬を出してきたのだった。それは普通の緑の透明なプラスチックのケースに入った目薬であった。

「最近売れてるんですよ、これ」

「そうなんですか」

「CMのお陰ですね」

そののせいだというのだった。

「それで」

「成程、それでなんですか」

「売れてますよ。はいどうぞ」

「それじゃあ」

お金を出してそのうえで買った。そうして次の日会社に来てからすぐに目薬をかけてみた。それから仕事場に向かった。

仕事は普通の会社である。大きな会社と言えば大きな会社だ。そのスペイン食品部門で働いているのである。評判は決して悪くない。

それで今日もその仕事場に入った。その第一声は。

「おはようでござります」

「ごわす?」

既に出社している青森出身の男の先輩がだ。不意に眉を顰めさせた。

「何、今の言葉」

「鹿児島弁?」

「うちに鹿児島の人いたっけ」

「あれ、そういえば」

ここだ。その出社してきた麻里子を見る。そのうえで言うのだった。

「まさか幣原さん?今行ったの」

「ごわすって」

「鹿児島出身って聞いたけれど」

「その通りでござすよ」

まさにそうだと。その鹿児島弁で返すのだった。

「それが悪かとですか？」

「酒、飲んでないよな」

長野出身のその響先輩は思わず問い返した。

「朝から」

「私朝からそんな破廉恥なことしないでござすよ」

「じゃあ何で鹿児島弁なの？」

「自然とこうなってるでござす。そげん気にせんといて下さい」

「いや、気にするから」

響はあくまで言う。

「だから何で鹿児島弁なんだよ」

「あの目薬したらこげんなつたとでござす」

「目薬？」

目薬と聞いてだ。響は眉を顰めさせた。

そしてそのうえだ。思い当たるふしを見出して言うのだった。

「あのCMのあれ？」

「その通りでござす。それでこげんなつたとでござすよ」

「目薬したら関西弁になるの？」

「そうなの」

「じゃあさ。俺が目薬したらさ」

響は怪訝な顔のまま話す。

第二章

「青森弁になるとか？」

「そげんなるかも知れんでござすな」

「じゃあさ、今その目薬持ってる？」

響は真面目な顔で問うた。

「その目薬」

「はい、これでごわす」

すぐにだ。麻里子のその長い手から目薬が差し出されてきた。

響はそれを受け取ってだ。早速目に入れてみた。すると。

「こんでそんな痛いことになったらびっくりするだ」

濁音が明らかに多くなっていた。

「確かにおらんとこは青森の津軽だ。そんでも」

「いや、なってますよ」

隣にいる名古屋出身の男の後輩が突っ込みを入れた。

「津軽出身にしてはインパクト弱いですけど」

「流石に太宰みたいにはいかないだ。あれは本当に痛い濁音だったと聞いているだ」

「うっん、じゃあ僕もそうなのかな」

「してみます？」

彼も麻里子に言われた。

「目薬」

「貸してくれる？それじゃあ」

「はい、どうぞ」

実際にしてみるとだった。彼もであった。

「さて、話し方はどうなったみゃのう」

「なってるでござすよ」

「ああ、ほんまだぎゃ」

すっかりと名古屋弁になっていた。そしてそれぞれの方言が出る

とだ。皆かなり性格があけっぴろげになっていたのだった。そこにこの場所の責任者である佐野チーフがやって来た、彼女は広島出身である。

「野村と大野は選手時代はよかつたんですが」

「ははは、阪神も苦しめられたよ」

眼鏡の中年の大阪出身の部長と話しながら仕事場に来ている。

「随分とね」

「けれど今は違いますよね」

「昔はねえ。阪神は弱かったから」

こんなことを言う部長だった。飄々とした感じの人物だ。スーツの着こなしが如何にもサラリーマン然としていて歩き方もそうなっている。

「広島にはねえ」

「今の野村と大野どう思います？」

「根性論に走り過ぎじゃないかな」

こう佐野チーフに返す。チーフは三十代の半ばの外見は知的な美女である。

「やっぱり」

「そうですね」

「広島の伝統だろうね、あれは」

部長は淡々と話す。

「猛練習と根性はね」

「そのせいで怪我人や故障者も多いんじゃないかな」

「そうじゃないかな」

部長はここでも淡々としていた。

「過ぎたるは及ばざるが如しってね」

「難しい話ですね」

「仕事だってそうだよ。無理は禁物だよ」

部長はここで仕事の話も入れた。

「勤勉なのはいいけれどね」

「そうですね、それは本当に」

「程々にしないとね。広島は練習のし過ぎなところがあるから」
「困ったことです」

こんな話をしながら仕事場に入る。するとそこは方言だらけだった。佐野はその有様を見てまずは目を顰めさせたのであった。

そしてそのうえでだ。麻里子達に問う。

「何かあったの？」

「あのCMの目薬を使ったでわすが」

「そうなってしまったんだべ」

「困ったことですぎや」

「ええと、また随分地域が離れてるわね」

佐野は麻里子や響達の言葉を聞いて述べた。

「鹿児島に青森に名古屋で」

「はい、そうでごわす」

麻里子はこう佐野に答えた。

「あの自分を変えられるっていう目薬を使ったでごわす」

「ああ、あれね」

佐野はその話を聞いてすぐにわかった。

「あのCMの目薬ね」

「そうでごわす。そうしたらもうすぐにこげんことになって」

「自分を変えるんじゃないやなくて地元に戻ったんじゃないの？」

佐野は麻里子の話を腕を組みながら聞いて述べた。

「それじゃあ」

「そげん思つとですか？」

「そう思うわ。ただ」

「ただ？」

「面白い目薬ね」

ここまで聞いて微笑んでの言葉だった。

第三章

「CMじゃわからなかったけれど」

「そげん思われますか、チーフは」

「ええ、それでね」

「はい」

麻里子は佐野の言葉を受けて応える。

「その目薬何処にあるかしら」

「ここでごわす」

言いながらすぐにその目薬を差し出した。

「使われるとですか？」

「よかつたらね」

実際にそうするということだった。そうして彼女も使ってみる。部長も同時にだ。するとであった。

「それで言葉遣いどんなのなってるけえ？」

「まんま広島弁やで」

部長が佐野に返す。

「どっからどう聞いてもな」

「そうですね。これ間違いないですけえ」

「何か広島弁って怖いんだべ」

響は佐野の広島弁を聞いて呟いた。

「仁義なき戦いみたいでおつかないんだべ」

「まあそれは否定しないけえ」

佐野は本当に広島弁そのままだった。

「けれど私はずっとこれ使ってたけえのお」

「そうだったんだべ」

「そうじゃけえ。ついでに言えばカープ命じゃけえ」

「カープって最下位になりそうだな」

響は余計なことを言ってしまった。

「まあ横浜あるから大丈夫だべな」

「そうでごわすな。今年はピッチャーが酷いでごわす」

麻里子も言ってしまった。

「監督とコーチがやばいでごわす」

「その話はいいんじゃないやけえ」

佐野は二人を嗜めた。しかしそれだけで、あった。

「まずは仕事は始めるけえのう」

「やっぱり凄く怖いんだべ」

「その筋に聞こえるでごわす」

「まあなあ。広島いうたらそれやからな」

部長もそれは否定しない。

「まあしかしや。仕事は始めるで」

「わかりましたけえ」

「そうするでごわす」

こう話してだった。この日全員方言丸出しで仕事をした。するとであった。

「何か昨日は随分能率がよかったわね」

佐野は自分の席から話した。

「何でかしら」

「あの目薬のせいですかね」

響は仕事をしながら佐野の言葉に応えた。白と青の冷暖房の効いたオフィスには今は標準語が流れている。昨日とは違う。

「やっぱり」

「そうよね。私も何か」

佐野は仕事を続けながら話す。

「昨日は気持ちよく仕事できたわ」

「方言だと何かあるんでしょうか」

麻里子もそれを言う。彼女は今はパソコンのボードを叩いている。

「やっぱり」

「少なくとも開放的になりましたよ」

その名古屋の後輩も言う。

「地元にいるみたいで」

「そうかもね。横浜はね」

実はこの会社は横浜にある。

「方言あまりないしね」

「都会とか以上に」

「何か違いますしね」

「本社は神戸だけれどね」

このことも話される。八条グループというグループの中の一社なのだ。

「神戸も方言弱いかしらね」

「まあ大阪程じゃないですね」

名古屋の後輩もそれを話す。

「大阪はどぎついでまで凄いですし」

「部長つて大阪出身ですよね」

「住吉なのよ」

佐野は麻里子の問いに答えた。

「そこでずっと生まれ育つてる人だから」

「何かあまり方言出てないですけど」

「苦労してなおされたみたいよ。私も実際大学卒業までずっと広島だったし」

佐野自身もそうだったのである。

「広島弁なおしたけれど。どうもねえ」

「方言の方がしっくりきますよね」

響は言った。

第四章

「やっぱり」

「そうよね。そういえば」

「そういえば？」

「藤木マネージャー」

佐野達の上司だ。課長にあたる。

「あの人沖縄出身だったから」

「方言凄そうですね」

「確かに」

「沖縄ですと」

麻里子も響も後輩も沖縄の言葉を思い出して話す。

「意味がわからないかも」

「相当ですしね、沖縄の言葉って」

「一回聞いてもわからないし」

「それはね、幣原さん」

佐野はここで麻里子を見てだ。そのうえで彼女に告げた。

「貴女の故郷の昔の言葉も」

「はい、全然わかりません」

麻里子は彼女が何を言いたいのかすぐにわかった。

「あれ、日本語なのかどうか」

「アクセントも凄いし。お年寄りの人でも使う人いなくなったそう

ね

「お酒飲んでる時に出たりしますよ」

こう話しはする。

「けれどそれでも。私もわかりません」

「何であんな言葉なのかしら」

佐野は首を傾げさせながら述べた。

「暗号みたいだけれど」

「何か他の国の人にわからないようにああした言葉にしたらしいですけれど」

麻里子はこう話す。これは本当のことである。他国の密偵から情報を漏れることを考えそのうえ他国の者かどうが見極める為にだ。そうした言葉にしたのである。

「それはちよつと」

「話せないのね」

「すみません」

「謝る必要はないわ」

佐野はそれはよしとした。

「別にね」

「そうなんですか」

「流石に昔の鹿児島言葉は聞いてもわからないし」

だからだというのだった。これはそれでいいとした。そしてそのうえで今度はだ。響を見て麻里子に対するのと同じことを言ったのだった。

「響君は青森だけれど」

「津軽です」

「太宰治ね」

彼女もまたこの作家の名前を出した。

「太宰はあその名士の家だったわよね」

「実家は今も政治家ですよ」

太宰治の本名は津島修治である。津島家は明治から続く政治家の家でもあるのだ。戦前ではかなりの土地を持っている地主でもあったことは有名である。

「太宰のお兄さんも政治家でしたし」

「そうだったわよね」

「ええ。その言葉はかなりアクセントが強くて」

「けれど君の言葉は」

「流石に今は標準語も入ってますから」

だからだというのである。

「別に」

「そこまではなのね」

「はい、けれどあの目薬をかけたら」

そうなればというのだった。

「地の言葉が出ますね」

「ううん、私もそうだったし」

佐野は二人の話を聞いてあらためて腕を組んで考える顔になった。

「何かあの目薬ってね」

「はい」

「どうしてあなるんですかね」

「目から直接刺激して方言を引き出すらしいのよ」

こう麻里子と響に話す。

「目と脳は直結してるから」

「それでなんですか」

「目からですか」

「ええ、そうなの」

そうだというのである。これは佐野が製薬会社にそのまま聞いた話である。

「それであなるらしいわ」

「何か凄い話ですね」

「確かに」

麻里子も響もそれを聞いて思わず唖った。

第五章

「飲むのならわかりますけれど」

「何処かのネコ型ロボットの目薬みたいですね」

「あれは消えるけれどこの目薬は方言を引き出すのよ」

佐野はそうだと話すのだった。

「けれど引き出されるのは方言だけかしら」

「つていいいますと」

「他にもありますか？」

「何かあれじゃないかしら」

佐野は真面目な顔で二人に対して話してきた。

「方言を一緒に自分も出してるみたいな」

「ありのままの自分をですか」

「それをなんですな」

「ええ、それよ」

まさにそれだというのである。

「私も広島弁を話すのと一緒に自分も出してる感じになつてたし」

「そういえば私も」

「俺も」

二人はそれを聞いてまた述べた。

「開放感ありました」

「不思議と」

「多分この目薬は方言を引き出させるだけよ」

佐野は今度はその目薬を右手の親指と人差し指に持って見ながら話している。

「ただそれだけだけれど」

「けれど故郷の言葉を話しているとですか」

「開放感が出てありのままの自分を出せる」

「そういうことよ。地元の言葉は大きいわ」

佐野は強い顔で頷いていた。

「例えば私の大好きな食べ物は何」

「牡蠣料理ですね」

「それとお好み焼きですね」

「ええ、そうよ」

やはりそれであつた。当然お好み焼きは広島のものである。

「あと野球はカープね」

「ええと、二十年近く優勝してませんよね」

「確か」

「その話はなしね」

カープの優勝の話はすぐに強引に打ち消させた。表情も強張っている。

「言っておくけれどね」

「わかりました」

「楽天もそうですし」

響も何気に自分の鼻息の球団の話をする。そして麻里子もだつた。

「ソフトバンクも最近優勝できてませんし」

「そうよね。部長だつてね」

「阪神がどうかしたかい？」

ここで都合よく部長も出て来た。

「全く。憎むべき巨人を百年連続で成敗しないと優勝した気にならないからね」

「広島に負けてもいいんですね」

佐野はさりげなく広島の話を出した。

「それは」

「阪神ファンは巨人以外には寛容なんだよ」

部長は笑いながら話した。

「例え日本シリーズに負けてもね」

「すいません」

「ははは、謝ったら駄目だよ」

すぐに麻里子に返す部長だった。かつてホークスに日本シリーズで負けたことを話しているのである。

「勝敗は常じゃないか」

「けれど相手が巨人なら」

「その時は別だよ」

響に対しても言う。

「巨人は日本人の敵だよ」

「そうですね、それは確かに」

「俺も巨人は嫌いだし」

麻里子も響も巨人については部長と同じ考えであった。二人もまた巨人については尋常ではない、しかし日本人として当然持たなければならぬ敵対心を持っているのである。巨人は北朝鮮と並ぶ日本の敵である。

「小久保の怨みがありますから」

「楽天主安心できませんしね、巨人の金には」

こう話しているとだった。佐野も加わってきた。

「全くよ。巨人はね」

「チーフもやっぱり」

「アンチ巨人ですか」

「広島で巨人を応援すればそれだけで死ねるわよ」

最早断言であった。

「江田島から呉まで泳いでもらうわ」

「鯨がいてもですね」

「そうよ」

ここでも断言だった。

「その場合はね」

「巨人は敵」

「まさにそうですね」

「まあ関西でも同じだけれどね」

麻里子と響だけでなく部長も言ってきた。

第六章

「それはね。しかしね」

「しかし？」

「部長、何かあるんですか？」

「あるよ。いや、この目薬はいいよ」

彼が目薬に話を戻してきたのだった。

「させばそれでありのままの自分を引き出すことができるからね」

「ありのままの自分を」

「それをなんですか」

「うん、自分を隠すことは時としては必要だよ」

大人の言葉だった。時と場合によってそうしたこと必要である、これは世間を生きるということにおいて絶対にしなければならぬことではある。

「それはね。ただ」

「ただ、ですか」

「それでもですか」

「そうよ。それでもだよ」

部長はここでも大人として二人と佐野に対して話す。

「その時としてはありのままの自分を出すことも必要なんだよ」

「時と場合によってはですか」

「ありのままの自分を」

「そういうものだよ。難しいけれどね」

彼は話す。

「それはね。それを考えるとね」

「この目薬はいい」

「非常にいいものなんです」

「じゃあ今から」

部長はあらためて三人に話す。

「この目薬を桐野君にも使ってもらおうか」

「マネージャーにもですね」

「今から」

「そうしてもらおう。じゃあ行こうか」

こうしてその桐野のところに向かう。彼は自分の部屋において事務仕事を黙々とこなしていた。四人はそこにやって来たのである。

「やあ桐野君」

「いいですか？」

「むっ？」

冷静、いや見方によっては冷徹な表情だった。黒く長く伸ばした髪に鋭い目をしている。端正であるがやはりそれ以上に冷たいものがそこにある。

「部長、それに佐野達も」

「実は君にプレゼントがあるんだよ」

部長は穏やかな笑みで彼に言ってみせた。

「いいかな」

「プレゼントですか」

「これだよ」

彼の机にそつとあの目薬を差し出してみせたのだった。

「これをね」

「ああ、あの目薬ですか」

その目薬を見てだった。桐野はその目をさらに鋭くさせた。

「今コマーシャルにもなっている」

「どうかな、さしてみないか？」

部長はまた彼に言ってみせた。

「この目薬を」

「ええ、いいですよ」

桐野は特に拒むことなく部長の言葉に応えた。

「それなら」

「よし、じゃあ是非ね」

「わかりました」

こうして彼はその目薬を手を取ってそのうえで自分の目にさしてみせた。そうしてそのうえでだった。彼もまたその地を出したのであった。

「まあウチナンチユーにはウチナンチユーの考えがあつてだ」

「ウチナンチユー？」

「何ですか、それ」

麻里子と響はその言葉に戸惑いを見せた。

「はじめて聞く言葉ですけど」

「一体」

「ああ、沖縄の言葉よ」

佐野がそのいぶかしむ二人に対して告げた。

「沖縄の人って意味なの」

「ああ、そうなんですか」

「そういう意味なんですか」

「そうなのよ。マネージャーも地が出て来たわね」

佐野はその二人を見ながら話した。

「さて、どうなるかしら」

「うっん、何か面白そうですね」

「どうなるかな」

麻里子と響は興味深い顔でその桐野を見る。するとであった。

桐野はさらに話す。その沖縄の言葉で。

第七章

「ヤマトンチューの堅苦しさとはまた別だからなあ」

「ヤマトンチューは」

「それって」

「所謂日本人つてことよ」

また佐野が二人に対して説明する。

「沖縄は昔違う国だったから」

「ああ、琉球王国ですね」

「それですね」

「そうよ」

また二人に対して話す。

「別の国だったからそうした表現になるのよ」

「成程」

「そうなんですか」

「さて、どうなるかしらね」

佐野もまた興味深い顔でその桐野を見ていた。

「マネージャーの地は」

「むっ、何か出てきたぞ」

部長はその桐野の動きを見て述べた。

「あれは」

「お弁当？」

「みただけけどあれは」

「こうしたものをこそこそ食わないといけないのは悲しい」

彼は言いながらその出してきた弁当を食べはじめた。見ればそのメニューはかなり独特のものだった。

「ミミガーに」

「ええと、ゴーヤに」

「ラフテーね」

「どれも沖縄料理だな」

四人は桐野が事務仕事をしながら食べはじめたその弁当の中身を見ながら述べた。四人共沖縄料理についての知識はしっかりとあった。

「それを急に食べるはじめるなんて」

「そういえばマネージャーって今まで人前で食べていたことってないけれど」

「実は違っていた」

「そうだったのか」

「あけつびろげに山程食べないと駄目なんだよ」

桐野は四人に対しても言う。

「いつもね」

「うん、まさかマネージャーって」

「実は開放主義？」

「そうみたいね」

三人はここでこのことを悟った。

「どうやら」

「そうだったのか」

「わからないものだね」

部長は自分の顎に手を当てて考える顔になって述べた。

「本当にな」

「わからないっていいますと？」

「いや、だから本当の自分というものはだよ」

それがわからないと。佐野に対して話すのだった。

「実際にね。わからないものだね」

「それが、ですか」

「実際になんですね」

「うん、本当の自分自身は中々見えない」

あらためて麻里子と響に対して話す。

「桐野君にしてもね」

「正直ですね」

その桐野からも言ってきた。

「ありのままの自分を人前で出すのなんて」

「はじめてだったか」

「はい」

まさにその通りだという。言葉は標準語に近いがそれでも訛りは確かに沖縄のものだ。そうした意味で彼は確かに沖縄人であった。

「本当に」

「そうか。しかし悪い気はしないな」

「それはありません」

桐野はその沖縄のアクセントで答えた。

「むしろ気分がいいです」

「そういうものだ。とにかくいい薬だよ」

部長はその薬を見ながらまた話した。

「ありのままの自分を出させてくれるんだからな」

「そうですね。それは確かに」

麻里子は部長のその言葉に頷いた。

「これからも時々使ってみます」

「いいことね。ただ」

「ただ？」

「できれば昔の鹿児島言葉も聞きたいわね」

佐野がくすりと笑って麻里子に言ってきた。

「それはね」

「勉強してみます」

「どんな言葉かね。聞きたいわね」

そのありのままの自分を出した麻里子への言葉だった。この目薬はヒット商品になった。誰もがありのままの自分を出したい時があるからこそ。

目
薬

完

2
0
1
0
・
7
・
2
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6011q/>

目薬

2011年2月2日23時10分発行